



キッズレター

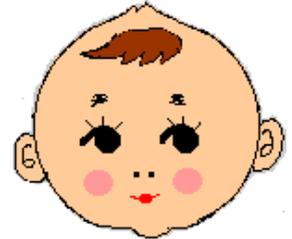
2001.11.07発刊 第69号

編集 大川総合病院小児科外来

はじめに

秋の深まりとともに外気温が徐々に低下します。ただ、手足口病・水痘など以前に夏かぜと呼ばれていたものが病院の近隣で流行しています。室内ではまだまだ暖かい温度が保たれているからでしょう。暖房やサッシの普及で、室内環境が年間

を通して大きく変動しないようになってしまったようです。



小児科外来 ホームページ
<http://shounika.hoops.ne.jp>

目次

はじめに	1
今月のレター(1) 「予防接種とウイルス感染」	1
ニュース&ハイライト	1
11月～12月ごろに流行する疾病	2
予約外来 予定一覧	2
今月のレター(2) 「赤ちゃんの便秘について」	2

(1) 予防接種とウイルス感染 坂口 善市

お子さまの健康を願う上で予防接種はたいへん有効性が高く簡便な免疫獲得法といえます。さて、予防接種では、接種前・接種直後・接種後1-2週間ごろに風邪ウイルスにより発熱した場合に問題となります。主な問題点は、ワクチン効果をどのように評価するか 再接種が必要かどうかなどが挙げられます。このような場合の基本的な考え方を示します。(1)接種前、接種直後に発熱した場合：風邪ウイルスが粘膜以外に免疫担当細胞であるリンパ球・マクロファージに感染している可能性があります。この場合、発熱後ほぼ3週間ぐらい「免疫機能の低下」することが分かっていますので、4週間位空けてから接種したほうがよいでしょう。次に、発熱時に生ワクチンを接種した場合、活発に増殖している風邪ウイルスによりワクチン株の増殖が抑えられてしまいます。この結果、生ワクチン効果が減弱することがあります。これを「**ウイルスの干渉現象**」と呼びます。以上の場合のように「免疫機能の低下」・「ウイルスの干渉現象」がある状態では、お子さまは十分な免疫を獲得できません。(2)接種後1-2週間ごろに発熱した場合：短い間隔で生ワクチンを続けて接種したときは、生ワクチン同士で干渉しあうことがあり、十分な免疫を得られないことがあり

ます。しかし、不活化ワクチンと生ワクチンの同時接種に関しては干渉しあうことはないと考えられています。また、不活化ワクチンの免疫反応は接種後数日で終了します。これらの点から、不活化ワクチン後、1週間以上あいて発熱した場合には、ワクチン効果の減弱を心配しなくてよいでしょう。次に、生ワクチン接種後では、接種後5-10日目にワクチンウイルス増殖のピークを迎えていますから、この時期の発熱の原因がワクチンのせいかわ風邪ウイルスのせいかわ判断は困難です。風邪ウイルスのせいで発熱している場合には、「**ウイルスの干渉現象**」で生ワクチンによる免疫を十分獲得できない可能性があります。ただ、MMRワクチンのようにほぼ同時にウイルス増殖のピークを迎えれば、お互いに干渉しあうことはないようですから、免疫を獲得できたか獲得できていないかの判断はたいへん困難なものとなります。獲得した免疫の程度を確認するためには抗体検査をすることが必要になります。以上の観点のほかに安全性なども考慮して当科では、いづれの接種でも4週間空けて次の接種をお勧めしています。



キッズレター

大川総合病院小児科外来 月刊情報誌
～ 子供たちの健康を願って ～

〒769-2329
香川県大川郡寒川町石田東甲
大川総合病院 小児科外来
内線 310

電話 : 0879 (43) 2521
Fax : 0879 (43) 6469
Email : okawa.gh@viola.ne.jp

ホームページをご覧ください。
<http://shounika.hoops.ne.jp>

時候に合ったテーマで毎月お母さま方に情報を提供させていただいています。

次号は12月上旬に発刊予定です。

11～12月に流行しそうな疾病

* 気温の低下とともに気管支炎・肺炎などの下気道感染が増えてきます。

小さなお子さまは喘鳴を伴い食事が摂れなくなりますから脱水症に注意します。

* 冬風邪ウイルスによる感染性胃腸炎が増えてきます。嘔吐・長引く下痢が特徴です。

嘔吐が治まるまで、短期間の絶食が大切になります。

* インフルエンザワクチン接種が開始されました。小学生までが1ヵ月あけて2回接種です。中学生以上は、1回接種でかまいません。

小児科予約外来のお知らせ

・乳児健診の予定(母子手帳) 担当医:井上医師

火曜日午後から診察です。1週間前までに予約して下さい。

11月 (06日 ・ 27日)

12月 (18日 ・ *)

・定期予防接種の予定 担当医:坂口・伊勢医師

印鑑・母子手帳が必要です。水曜日午後に予約制で行っています。

前週金曜日が締め切りです。

11月 (07日 ・ 21日 ・ 28日)

12月 (05日 ・ 12日 ・ 19日)

・心臓外来の診察 担当医:伊勢・秋田医師

火曜日午後2時に実施しています。要予約です。

次回予定は11月13日(火曜日)

12月11日(火曜日)です。

(2) 小児の下痢

近藤 佐代子

* **下痢の原因**として消化管感染症 細菌性:カンピロバクター・サルモネラ・病原性大腸菌・エルシニア・黄色ブドウ球菌など ウイルス性:ロタ・アデノ・エンテロウイルスなど その他感染症:上気道炎・尿路感染症・突発性発疹症・麻疹などがあります。食事性下痢:食べ過ぎ・母乳性下痢などの他に食事性アレルギー・ストレス・抗生物質などが考えられます。

* **下痢に伴う病態**として 脱水、電解質異常 低血糖 長期の場合には栄養障害 痙攣 血便、脱肛などの器質的障害 肛門周囲の皮膚病変などが見られる場合があります。

* **下痢の時のケア**:下痢の回数、性状の観察(におい、色) 粘膜の混在はないか、血液の混入はないか観察をしましょう。急激に水分が失われますから水分の補給をしてあげて下さい。乳幼児のイオン飲料も有用ですが塩分の濃度が低い味噌汁の上澄みや野菜スープの

上澄みなどを利用して塩分が補えます。水分を一度にたくさん飲むと胃結腸反射により排便を促し、のむとすぐ下痢をくりかえすので少量ずつ頻回に摂取するようにしましょう。オレンジやみかんなど、柑橘系のはひかえましょう。人工栄養(ミルク)はうすめずそのままでもいいです。離乳食をすすめている最中の場合は、1ランク元へ戻りましょう。食事は油っこいものや糖分の多いもの、冷たいものは避けて、消化のよいやわらかいもの(人参粥、にこみうどん、湯豆腐など)で料理の工夫をしましょう。



下痢が続くと、あっというまにおしりがただれたり、おむつかぶれができてしまいます。こまめにおむつをとりかえてあげましょう。ときには、座浴をしてあげましょう。

おむつ処理を介しての感染伝播の防止のために、手洗いはかならず行いましょう。